弓削道鏡と天皇の位

田中久夫

はじめに(望まれた道鏡)

天平宝字八年(七六四)九月乙巳(『続日本紀』卷第二十五)

に発生した藤原仲麻呂のクーデターを無事に乗り越えた女帝高野天皇は、ついで淳仁天皇をも抑えて政権を安定させなければならなかった。そのためには先ずは淳仁天皇の基盤である紫微中台(皇后宮)を奪回することであった。それが次の『続日本紀』卷第二十五、天平宝字八年(七六四)十月壬申条の記事である。

高野天皇、兵部卿和氣王・左兵衛督山村王・外衛大将百済王敬福らを遣して、兵数百を率ゐて中宮院を囲ましむ。

そして、天皇の位は聖武天皇が私・高野天皇に「天下は朕が子いましに授け給ふ」たものである。ところが私が即位させた淳仁天皇は、聖武天皇のこの詔を無視した上に、位を譲った私に対して無礼な振舞をしてきた。このことよって、「此

の年ごろ見るに其の位にも堪へず」ということが明らかとなった。しかも「今聞くに、仲麻呂と心を同じくして窃に朕を掃はむと謀りけり」と、淳仁天皇は先の天皇である私の排除を謀った。このような者を天皇にしておくわけにはいかないと、山村王に云わせたのである。

そこで淳仁天皇を「帝の位をば退け賜ひて、親王の位賜ひて淡路国の公と退け賜ふ」ということにした。そして、「淡路国を太炊親王に賜ふ。国内に有てる官物調庸等の類はその用ゐる所に任ず。但し出挙の官稲は一ら常の例に依れ」と処断したのであった。あわせて仲麻呂とともにあった船親王を隠岐の国へ流し、池田親王も諸王として「土左国に流し賜ふ」という処置をした。

高野天皇の理屈は、今見てきたように、聖武天皇から高野天皇は譲位されたものである。私の次ぎにと淳仁天皇は私が指名した。ところが指名した人が任に堪える者でなかったの

で撤回することにした。そして再度、即位して称徳天皇となつたとある。ついでたちまちはと、政権担当者を指名した。天平宝字八年(七六四)九月乙巳(『続日本紀』卷第二十五)の記事の続きである。

…従三位藤原朝臣永手に正三位を授く。正四位下吉備朝臣真備に従三位。正五位下藤原朝臣繩麻呂に従四位下。正七位上天津連大浦に従四位上。従七位上牡鹿連嶋足、正六位上坂上忌寸苅田麻呂、外従五位下栗田朝臣道麻呂、従六位下中臣伊勢連老人、従八位上弓削宿祢浄人、外従五位下高丘連比良麻呂、正五位上日下部宿祢子麻呂に従四位下。従七位下紀朝臣船守に従五位下。正七位上民忌寸総麻呂に外従五位下。弓削宿祢浄人に姓を弓削御浄朝臣と賜ふ。中臣伊勢連老人には中臣伊勢朝臣、天津連大浦には天津宿祢。牡鹿嶋足には牡鹿宿祢。坂上忌寸苅田麻呂には坂上大忌寸。

とある。興味深いのは、ここに旧豪族の名がないことと、藤原広嗣の乱のとき叛乱の口実となった吉備真備の名がここにあることである。そして今ここに新しく出てきた名に従八位上弓削宿祢浄人がある。河内国若江郡弓削郷の人、道鏡の

弟である。

もつとも弓削道鏡の名自身は仲麻呂の乱の前年の天平宝字七年(七六三)九月癸卯(『続日本紀』卷第二十四)に見ることがができる。

使を山階寺に遣して、詔を宣らしめて曰はく、「少僧都慈訓法師、政を行ふこと理に乖きて、綱とするに堪へず。その任を停むべし」とのたまふ。衆の議するに依り、道鏡法師を少僧都とす。

というものである。「少僧都慈訓法師、政を行ふこと理に乖きて、綱とするに堪へず。その任を停むべし」とある少僧都慈訓法師に代わって、道鏡法師が人々に推されて少僧都になったとある。

一、道鏡と太政大臣

この少僧都慈訓法師がこれまで政権中枢部にいたことは、『続日本紀』卷第十九、天平勝宝八歳(七五六)五月丁丑の条にその記事を見ることがができる。『続日本紀』卷第二十二、天平宝字三年(七五九)六月丙辰の条である。そこには僧を代表して僧侶の世界の改革を奏言している慈訓の姿がある。こ

ここでは、参議従三位氷上真人塩焼の奏、播磨大掾正六位上山田連古磨の奏があつた。

さらに『続日本紀』卷第廿三、天平宝字四年(七七〇)七月二十三日庚戌の条には、僧の位階制を大僧都良弁と共に進言して組織化をはかった。その時の勅答として「来表を省みて具に示すことを知る。緇徒を勸誡することは実に利益すべくも、四級を分置することは恐るらくは煩勞を致さむ。故にその修行位・誦持位は唯一色を用ひ、数名とせず。若し誦経忘却し戒行過失する者有らば、衆人の知るを待ちて、然して後に改正せよ。但し、師位の等級は奏状の如くなるべし」という結果を得ている。

この淳仁天皇の勅は『続日本紀』の本文の脚注に『三代格に天平宝字四年七月廿三日勅として収め、弘仁格抄四、治部にも同日の「制二四位十三階、三色師位并大法師位一事」としてみえる』と注意されているほどである。

したがって、道鏡が排除され、官僚貴族藤原氏が登場して来ると、再び光仁天皇の下、慈訓が登用されてくる。『続日本紀』卷第三十、宝亀元年(七七〇)八月乙卯の条の次の記事がそれを示している。「河内職を復、河内国とす。慈訓

法師・慶俊法師を復、少僧都とす」とあるものである。

このような慈訓が称徳天皇によつて排除され、弓削道鏡が登場してきたのであつた。したがって、当然ながら道鏡は称徳天皇の傍にあつて政治を補佐することになる。補佐以上に側近としての活躍が求められた。それを藤原仲麻呂が殺害された後、仲麻呂の経歴が紹介されている『続日本紀』卷第二十五の天平宝字八年(七六四)九月壬子の条に、道鏡が果たした役割を見ることができるとある。

：(勝宝四年、太師(太政大臣)に転す。その男正四位上真先(仲麻呂の第二子)、従四位下訓儒麻呂(仲麻呂の第三子)・朝狩(仲麻呂の第四子か)を並に参議とし、従五位上少湯麻呂(仲麻呂第五子)、従五位下薩雄(仲麻呂の子)・辛加知(仲麻呂の子)・執棹(仲麻呂の子)を皆衛府・関国司に任す。その余の頭要の官も姻戚ならずといふことと莫し。独り権威を擅にして猜防日に甚し。時に道鏡常に禁掖に侍ひて甚だ寵愛せらる。押勝これを患へて懐自ら安からず。乃ち高野天皇に諷して都督使として、兵を掌りて自ら衛る。諸国の試兵の法に准拠して、管内の兵士国毎に廿人、五日を番とし、都督衙に集めて

武芸を簡閲す。奏聞し畢りて後、私にその数を益し、太政官の印を用ゐて行下す。大外記高丘比良麻呂、禍の己に及ばむことを懼りて、密にその事を奏す。中宮院の鈴・印を収るに及びて、遂に兵を起して反く。

とある。ここに見るように、藤原仲麻呂が「頭要の官も姻戚ならずといふこと莫し」と身の回りに家族同族をいくら廻らしても、「道鏡常に禁掖に侍ひて甚だ寵愛せらる」とあることは仲麻呂にとつて脅威であつた。慈訓の後、それほどまでに弓削道鏡は権力の中枢にいたのであつた。

その様子を乱後の『続日本紀』巻第二十五、天平宝字八年(七六四)九月甲寅の条には次のように表現している。

然るに之が奏ししく、「此の禪師(道鏡)の昼夜朝庭を護り仕へ奉るを見るに、先祖の大臣(物部弓削大連守屋)として仕へ奉りし位名を継がむと念ひて在る人なり」と云ひて、「退け賜へ」と奏ししかども、此の禪師の行ひを見るに至りて淨し。仏の御法を継ぎ隆めむと念行しまし朕をも導き護ります己が師をやたやすく退けまつらむと念ひて在りつ。然るに朕は髪をそりて仏の御袈裟を服て在れども、国家の政を行はずあること得ず。仏も

經に勅りたまはく、「国王い王位に坐す時は菩薩の条戒を受けよ」と勅りたまひて在り。此に依りて念へば出家しても政を行ふに豈障るべき物には在らず。故、是を以て、帝の出家しています世には、出家して在る大臣も在るべしと念ひて、樂ひます位にはあらねども、此の道鏡禪師も大臣禪師と位は授けまつる事を諸聞きたまへと宣る。：

というものである。高野天皇は仏教徒として政治をおこなうことにする。その指導者を道鏡禪師にする。そのために大臣禪師に任命すると宣言したのである。

そしてやがて称徳天皇は天皇職を道鏡にと考えるようになった。それというのも、すでに淳仁天皇には「常の祀小事は今の帝行ひ給へ」としていたからである。つまり少僧都道鏡が「常の祀小事」をしさへすれば、天皇職をこなせると考えたからにはほかならない(1)。

さらに道鏡が天皇職に従事できると考えられたのは、すでに藤原不比等と橘三千代との間に生れた藤原光明子が、皇后になつていたことであつた(2)。天皇家以外でも三国家機関のいずれかのトップとなることができる道筋ができていた

からであった。

その上、弓削道鏡は「先祖の大^{とほつちや}臣^{おほまへつちみ}（物部弓削大連守屋）として仕^{つか}へ奉^{まつ}りし」といわれる名族の後裔であった。このことは当時にあつては周知の事実であった。これは常陸土豪出身の藤原氏とは大きく異なる所であつた⁽³⁾。

これらのことによつて道鏡が天皇位に就くといふことは、官僚貴族藤原氏も反対することができなかつたといふことになる。結局、備前和氣郡（岡山）の小豪族ではあるが天皇家出身と伝える和氣氏（『新撰姓氏録』の「右京皇別下」に和氣朝臣がある）と、九州の宇佐八幡神の力を藤原氏は借りて、道鏡の即位を阻止するほか方法がなかつた。なお、『古事記』中つ巻の神武天皇の「一、東征」にも日向を出發した天皇が、まず、豊国の宇沙に到りましし時」とあるように、宇佐は神武東征の第一歩を示す所であつた⁽⁴⁾。日向出身の神武天皇を最初に受け入れた場所であつた。

清麻呂は仲麻呂の乱が終わり、孝謙天皇が重祚した翌年の天平神護元年（七六五）三月には右兵衛少尉にすすんだ。つまり和氣氏は壬申の乱以来の天皇家の軍事力を構成する一員であつたことをこのことは示している。この和氣清麻呂に

「天皇」は弓削であつてはならないと、路真人豊永が清麻呂を説得したのであつた。この言葉に清麻呂は乗つたのであつた。清麻呂も天皇家を支えてきたという自負心があつたのであろう。

これに対して、天皇の側でも和氣氏は天皇家に忠実な軍隊という意識があつた。これが裏切られたのであつた。天皇が信頼していた舍人階級の人々から足もとをすくわれたといふ思いが天皇にはあつたのである。

それをまた『続日本紀』卷第三十、神護景雲三年（七六九）^{二十五日}九月己丑の条の称徳天皇の言葉に見ることができぬ。

詔^{みことり}して曰^{のたま}はく、「天皇が御命^{みこと}らまと詔^のりたまはく、夫^それ臣^{おほまへ}下^{した}と云^いふ物は君^{きみ}に随^{したが}ひて淨^{きよ}く貞^{まこと}かに明^{あか}き心を以^{もつ}て君^{きみ}を助^{たす}け護^{まも}り、対^{むか}ひては無^{あや}礼^なき面^{おも}へり无^なく後^{のち}には誘^{せし}る言^{こと}无^なく、奸^{かた}み偽^{いつは}り詔^{まが}ひ曲^{まが}れる心^{こころ}无^なくして奉^{つかへ}まつ侍^{まつ}るべき物^{もの}に在^あり。然^{しか}る物^{もの}を、從^{したが}ひて五位^{ごい}下^{した}因幡^{いんぱん}国^{くに}員^{みん}外^{ほか}介^け輔^ほ治^ち能^{のう}真^{まこと}人^{ひと}。清^{きよ}鷹^{たか}、其^{その}が姉^{あね}法^{ほふ}法^{ほふ}均^{きん}と甚^{いと}大^{おほ}きに悪^{わる}しく奸^{かた}める忌^{いみ}語^ごを作りて朕^{われ}に對^{むか}ひて法^{ほふ}均^{きん}物^{もの}奏^{まを}せり。此^こを見るに面^{おもて}の色^{いろ}形^{かたち}口^{くち}に云^いふ言^{こと}猶^{なほ}明^{あき}らかに己^{おの}が作りて云^いふ言^{こと}を大^{おほ}か神^{かみ}の御^{おほまへ}命^{こと}と借^かりて言^いふと知^しらしめしぬ。問^とひ求^{もと}むるに、朕^あが念^{おも}して在^ある

が如く、大神の御命には在らずと聞し行し定めつ。故、是を以て、法のまにま退け給ふと詔りたまふ御命を、衆諸聞きたまへと宣る。

というものである。裏切られた感を持つ者の激しい言葉である。さらに「復此の事を知りて清麻呂等と相謀りけむ人なりとは知らしめして在れども」と、路真人豊永の存在を考えていることがわかる。両者は法均尼とともに称徳天皇には非常に身近な存在であった。それが「復清鷹等は奉侍れる奴と念してこそ姓も賜ひて治め給ひてしか」というほど落胆も大きなものであった。

二、道鏡の政権への努力

もちろん、一方で、道鏡は道鏡で称徳天皇の「国家の大事賞罰二つ」を手に入れる努力をしていた。その実行者になったのが、弟の弓削連浄人であった。『続日本紀』巻第二十五、天平宝字八年（七六四）七月辛丑の条に、

授刀少志従八位上弓削連浄人（道鏡の弟）に姓を弓削宿祢と賜ふ。

ということが始まる。そして天平神護元年（七六五）二月癸亥

『続日本紀』巻第廿六）には、

従四位下弓削御浄朝臣浄人に従四位上を授く。正六位上吉弥侯根麻呂に外従五位下。

と、称徳天皇のもとで弓削一族は確かに高官へと昇進していた。

ついで、『続日本紀』巻第廿六、天平神護元年（七六五）二月甲子条の外衛府に対する補注二六の一五の記事に見るように、授刀衛を中心に「近衛・中衛・外衛の三衛を五衛府の上に位置づけたもの」というもと授刀衛の近衛府と内厩寮を作り、弓削氏が天皇側近の軍事力となつていることを示している（5）。

さらには、仲間作りも始めた。道鏡自身も弓削一族だけでは即位することはできないと思つたのであろう。『続日本紀』巻第二十五、天平宝字八年（七六四）十一月庚子の条によると、それこそ日向以来の仲間である賀茂氏と提携しようとしたらしいのである。

復高鴨神を大和国葛上郡に祠る。高鴨神は、法臣円興・弟中衛将監従五位下賀茂朝臣田守ら言さく、「昔、大泊瀬天皇（雄略天皇）葛城山に獵したまひし時、老人有

りて、毎つねに天皇すめらみことと相遂あひおひて獲えものを争あらそふ。天皇怒すめらみことりて、その人ひとを土左国とさくにに流ながしたまふ。先祖さきねの主つかひれる神化かみくして老夫おきなと成なり、爰こゝに放逐はうちくせらる」とまうす。今前記いまのあかみを検かふるに、その事ことを見みず。是こゝに、天皇乃すめらみことち田守たもりを遣つかはして、これを迎むかへて本处ほんしよに祠まつらしむ。

とある記事である。高野天皇は雄略天皇と行き違いのあつた神武天皇の先駆けであつた賀茂氏の祖先高鴨神を、大和国葛上郡かづらのかみに祀まつらせたというのである。この運動を行なつたのが法臣ほふしん円興えんこうと弟中衛将監おとちうゑのしやうげむ從五位下かみ賀茂朝臣かもち田守たもりであつた(6)。またこうすることによつて、淡路廢帝を阿波一国内に閉じ込めようとしたともいえる。まだまだ高野天皇を巡る周囲は危険に満ちたものであつたことも確かであつた。称徳天皇が淡路廢帝を抑えるために紀伊へ行き、その帰途、弓削の行宮に寄つた天平神護元年(七六五)閏十月乙未せひに、「正六位下賀茂朝臣諸雄かもちに從五位下を授く」とあるのも、それである(『続日本紀』卷第二十六)(7)。

ともかくも、称徳天皇は、継体天皇が九州の統治を委ねた物部氏を重用し(8)、あわせて、九州以来、天皇と共にあつて大和政權確立の先駆けをなした賀茂氏を、身の廻りにおい

て、この難局を切り抜けようとしたのであつた(9)。

そして称徳天皇は常陸から登場してきた新興貴族を抑え込もうとしたのであつた。弓削道鏡を「常の祀まつり小事」を行なう天皇につけ、女帝称徳天皇は皇后宮にあつて「国家の大事賞罰二つの柄もとは朕行はむ」と考えたのである。さらには『続日本紀』卷第二十七 天平神護二年(七六六)十月乙巳にじふにの条の記事である。

詔みことのりしたまはく、「法王ほふおうの月料げつりやうは供御くぐに准へよ。法臣ほふしん大僧都だいそうづ第一修行進守大禪師だいしゆんしんしゆだいぜんしんこう円興えんこうは大納言だいなごんに准へよ。法ほふ參議さむぎ大律師だいにし脩行進守大禪師しゆぎやうしんしゆだいぜんし正四位上せいしゆじ基真きしんは參議さむぎに准へよ」とのたまふ。

とある。弓削道鏡が政治をできるようにとの配慮がにじみ出ている人事である。

そして身の回りには気心の知れた女性を配し、「天皇」としての業務を行なうとしたのであつた。

その例が次の『続日本紀』卷第二十九、神護景雲二年(七六八)十月癸丑みづひの条の記事である。

正四位下せいしゆげ吉備朝臣きびあそみ由利ゆりに從三位を授く。從五位下へぐり平群朝臣へぐりあそみ真繼まつぐに從五位上。无位藤原朝臣ふぢはらあそみ浄子きよこに從五位下。

とある。ここにある吉備朝臣由利は称徳天皇の臨終の床にあつたときも、傍から離れなかつた女性である。さらには次の女性への叙位の記事である。『続日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)十月乙卯の条である。

従四位下佐伯宿祢伊多智・坂上大忌寸菟田麿に並に従四位上を授く。従三位藤原朝臣百能(麻呂の女、豊成の室)に正三位。正四位下藤原朝臣家子に正四位上。従四位上大野朝臣仲智(東人の女、藤原朝臣永手の室)に正四位下。従五位下久米連若女に従五位上。无位多治比真人古奈弥に従五位下。

ここにあるように、多くの女性が政治の中核で活躍したのであつた。この時期には多くの女性への叙位任官の記事を見ることが出来る。『続日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)六月丁丑の条の記事もそうである。

従五位下尾張宿祢若刀自に正五位下を授く(10)。

三、僧侶政治

もちろん、弓削道鏡の側近くにそれこそ有能な官僚が配せられることになる。早くに手が付けられている。それを『続

日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)二月癸巳の条に見ることが出来る。

正三位弓削御浄朝臣清人を大納言とす。内豎卿・衛門督・上総守は故の如し。従三位中臣朝臣清麿を中納言。神祇伯は故の如し。大藏卿従三位藤原朝臣魚名を参議。従五位上賀茂朝臣塩管を神祇大福。従五位下中臣朝臣子老を中務少輔。従五位上藤原朝臣家依を侍従。従五位下坂上王を大監物。従五位下巨勢朝臣公成を左大舍人頭。従五位上豊野真人奄智を図書頭。従五位下藤原朝臣家依を式部少輔。侍従は故の如し。従五位下高橋朝臣広人を散位助。外従五位下土師宿祢位を諸陵助。従五位上石川朝臣人成を民部大輔。従五位下石川朝臣己人を主計頭。従五位下田部宿祢男足を助。正五位上大伴宿祢益立を兵部大輔。外従五位下伊吉連真次を鼓吹正。従五位上巨勢朝臣清成を大藏大輔。従五位上榎井朝臣子祖を宮内大輔。従五位下清原真人清貞を少輔。従五位下石川朝臣恒守を木工頭。従五位下布勢王を内膳正。従四位下多治比真人土作を左京大夫。讚岐守は故の如し。従四位下百濟朝臣足人を右京大夫。外従五位下上毛

野公真人を造東大寺大判官。外従五位下飛驒国造高市麻呂・橘部越麿を並に造西大寺大判官。従五位下安倍朝臣少東人を衛門佐。外正五位下葛井連根主を大尉。従四位下佐伯宿祢伊多智を右衛士督。上野員外介は故の如し。従五位下藤原朝臣長道を佐。従五位下弓削御浄朝臣塩麿を左兵衛督。従五位下巨勢朝臣池長を右馬助。陸奥介従五位下田口朝臣安麿を兼鎮守副將軍。大掾従五位上道嶋宿祢三山を兼軍監。正五位上石川朝臣名足を大和守。外正五位下敢磯部忍国を志摩守。従五位下石上朝臣真足を遠江介。従五位下粟田朝臣鷹守を安房守。従三位藤原朝臣繩麿を近江按察使。民部卿・勅旨大輔・侍従は故の如し。従五位下吉備朝臣真事を美濃介。正五位下藤原朝臣雄田麿を武蔵守。左中弁・内匠頭・右兵衛督は故の如し。従五位下葛井連立足を若狭守。外従五位下道朝臣黒麿を越前介。外従五位下丹比宿祢真継を伯耆守。従五位下藤原朝臣種継を美作守。従五位下藤原朝臣雄依を備前守。従五位下石川朝臣真人を備中守。従五位下阿倍朝臣草麿を介。園池正は故の如し。従五位下藤原朝臣少黒麿を安芸守。従五位上高円朝臣広世を

周防守。従五位下中臣朝臣常を阿波守。外従五位下板茂連真釣を伊予介。是の日、勅したまはく、「令に准へて、高橋・安曇の二氏を以て内膳司に任する者は奉膳とせよ。その他の氏を以てこれに任する者は、名づけて正とすべし」とのたまふ。

とあるのがそれである。翌日の『続日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)二月甲午には、

无位弓削御浄朝臣浄方に従五位下を授く。

と見えている。ついで『続日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)四月乙酉の条には、

従五位下弓削御浄朝臣広方を武蔵介とす。近衛将監は故の如し。外従五位下内蔵忌寸若人を員外介。

とある。近衛将監は天皇の軍隊でもあるが、身辺警護の事もやる。

もちろんこれより先に『続日本紀』巻第二十九、神護景雲二年(七六八)正月乙卯の条には、

正四位上藤原朝臣繩麿、正四位下石上朝臣宅嗣を並に従三位を授く。従五位下藤原朝臣弟繩に従五位上。播磨国、白鹿を献る。

と、物部氏の本家の主ともいうべき石上朝臣宅嗣やかつぐが従三位へ

と位を上げられている。さらには、こうした状態を受けてで

あろう四月甲寅二十九日の条に、聖武皇帝と称する男子が現われた。

それも「石上朝臣志斐手が生む所」であるという。称徳天皇

の皇太子になろうかという男子である。ただこれは偽りであ

るとして遠流に処せられた。これを横田健一は「この男子に

も多少の理がありそうである」と表現している(『道鏡』前

掲書、「六 道鏡の政治」の項)。それにしても、失敗ではあ

ったが、これによって万全の策ができあがったということに

なる。『続日本紀』卷第二十九、神護景雲二年(七六八)十月

甲子の条の記事はさらにこのことを物語っている。

石上神いそのかみのかみに封五十戸を充つ。能登国のとこく気多神けたのかみに廿戸と田二

町。即ち、左右大臣に大宰すなはの綿各二万屯。大納言諱わたのおおの(白

壁王)・弓削御浄朝臣清人ゆげのみきよひと(道鏡の弟)に各一万屯。従

三位文室真人ふむや浄三じやうさむに六千屯。中務卿ちゆうむきやう従三位文室真人

大市おほし・式部卿しきぶきやう従三位石上朝臣宅嗣いそのかみのかみに各四千屯。正四位

下伊福部女王いほきべのおほきみに一千屯。新羅しんらの交関物けうくゑんぶつを買かふため為なり。

とある。ここにあるように、石上神への手厚い処遇がある。

弓削道鏡・物部氏への挺入れ策が窺われる記事である。さら

には弓削御浄朝臣清人に軍事に大きくかわらせた。

それが、『続日本紀』卷第二十九、神護景雲二年(七六八)

十一月己亥条の次の記事である。

従四位下国中連公麿くになか きみまろを但馬たぢま員外みんぐゑ介すけとす。是の日、正三位

弓削御浄朝臣清人ゆげのみきよひとを檢校兵庫將軍けむけうひやうごしやうぐんとす。従四位下藤原朝

臣雄田麿をだまろを副將軍ふくしやうぐん。従五位下紀朝臣船守ふなもり・従五位下池田

朝臣真杖まひらを並に軍監ぐんけん。六位の軍監二人。軍曹四人。

こうしたなかに、道鏡天皇への運動を行なっていた山階寺

の僧基真ほふしきしんが、師主ししゆ法臣ほふし円興えんきやうから排斥されるという事件が発生

した(11)。

なお、神護景雲二年(七六八)十二月甲辰四日の記事は次の通

りである。「山階寺の僧基真は心性常しむしやうつね無く、好このみて左道さだうを学

ぶ。詐いつはりて童子どうじを呪縛じゆばくして、人の陰事おむじを教説けうせつす。至乃しこのみならず、

毘沙門天びしゃもんてんの像ざうを作りて密ひそかに数粒すりふの珠子しゆしをその前に置き、称

して仏舍利ぶつしやりを現あらはすと為なす。道鏡だうきやう、仍より時ときの人ひとを眩耀ぐゑんえうして己おのが

瑞すいとせむと欲すめらみこじふ。仍なほち天皇てんかうに諷あめしたして、天下あめつちに赦ゆるし、人ひとごと

に爵しやくを賜たまふ。基真きしんは姓しやうを物部浄志朝臣ものべのきよしと賜たまはり、法参議ほふさむぎに拜はい

せらる。隨身すいじんの兵八人へいはちにん。基真きしんに怒いかりを作なさるる者ひとは、大夫だひに列れつ

すと雖いへども、皇法くわうほふを顧かへりみず。道路だうろこれおそを畏おそれて、避さぐることと虎

を逃るる如し。是に至りて、その師主法臣円興を凌ぎ突き
て、飛驒国に擯けらる」とある。

それにしてもここにいう「道鏡、仍て時の人を眩耀して己
が瑞とせむと欲ふ」というのは、基本的に道鏡にはあつては
ならないことである。瑞と云うのは「孝経援神契に曰はく、
『天子孝あるときは、天竜降り、地龜出づ』といふ。熊氏が
瑞応凶に曰はく、『王者偏せず覚せず、耆老を尊び用ゐ、故旧
を失はず、徳沢流洽するときは、靈龜出づ』といふ」とまう
す」というのがその理由である。祥瑞は天子への評価である。
これを道鏡にあつたというのであるから人々が驚いたので
ある(12)。

四、僧侶政治の終焉

そして、年があけた『続日本紀』巻第二十九、神護景雲三
年(七六九)春正月壬申三十一日の条に、

法王道鏡は西宮の前殿に居り。大臣已下賀拝す。道鏡自
ら壽詞を告す。

とある所を見ると、『続日本紀』の註がいうように、法王と
して正月の賀拝に臨んだということになる。しかもこの席に

は称徳天皇がいたようにも思える。このことは『続日本紀』
巻第二十九、神護景雲三年(七六九)春正月丙子七日の条に、

法王宮に御しまして、五位已上を宴したまふ。道鏡、五
位已上に摺衣人ごとに一領を与ふ。蝦夷には緋袍人ごと
に一領。左右大臣には綿各一千屯を賜ふ。大納言已下
も亦差有り。

とあることから、称徳天皇が西宮の席にあつたと考えられ
る。七日には天皇が答礼の形で法王宮を訪れ、そこで五位已
上を宴したというからである(13)。

道鏡は道鏡で、この席に出席してそれこそ高級官僚たちに
大量の綿などを与えたのであつた(14)。

ここまでできていた道鏡の天皇職就任が失敗したことによ
つて、称徳天皇は本当に心身ともに大きな痛手を受けた。祥
瑞である白鹿とか白雀が報告されてきても『続日本紀』巻
第三十、宝亀元年(七七〇)五月壬申十一日「朕、博徳を以て祇み
て洪基を奉けたり。善政未だ孚あらぬに、嘉貺頻に降れり」
といつて、これへの対応策は藤原永手と吉備真備に丸投げし
ていることによつてもわかる。そして、

左大臣藤原朝臣永手・右大臣吉備朝臣真吉備已下十一人

奏すらく、「臣ら言さく、臣聞く、粵に開闢けてより世に君臨有りて、休徴嘉応、時に亦これを聞けども、雑沓續粉とあること、豈此の如く盛ならむや。伏して惟みるに、皇帝陛下、徳を蘊み機に乗りて、区宇を再造したまへり。天地を括して以て裁ち成し、禎祥に叶ひて業を定めたまふ。

という意見が出てきた。それを聞いた称徳天皇はそのまま受け入れて、「制して曰はく、『可し』とのたまふ」といったとある。

天皇は道鏡の即位を阻止されて心身ともに痛みつけられたのであった。このことはさらに『続日本紀』卷第三十、宝龜元年(七七〇)六月辛丑の条に、「初め、天皇、由義宮に幸したまひてより後、不^{のち}予^{みやまひ}して月を^{ひつ}経たり」とあることによつてもわかる。さらには、このときに併せて天皇の軍勢力をすべてこの二人に渡したのであった。

是に、左大臣に勅して、近衛の事、外衛の事、左右兵衛の事を撰知らしめたまふ。右大臣には中衛・左右衛士の事を知らしめたまふ。

この記事は藤原永手と吉備真備が、天皇の身边に関わる軍

勢力を手に入れたことを示している。

そして、称徳天皇はこの二か月後の『続日本紀』卷第三九、宝龜元年(七七〇)八月癸巳のときに、

天皇、西宮の寝殿に崩りましぬ。春秋五十三。左大臣従一位藤原朝臣永手、右大臣正二位吉備朝臣真吉備、参議兵部卿従三位藤原朝臣宿奈麻呂、参議民部卿従三位藤原朝臣繩麻呂、参議式部卿従三位石上朝臣宅嗣、近衛大将従三位藤原朝臣藏下麻呂ら、策を禁中に定めて、諱(光仁天皇)を立てて皇太子とす。左大臣従一位藤原朝臣永手、遺宣を受けて曰はく、「今詔りたまはく、事卒然に有るに依りて、諸臣等議りて、白壁王は諸王の中に年齒も長なり。また、先の帝(天智天皇)の功も在る故に、太子と定めて、奏せるまにまに宣り給ふと勅りたまはく」と宣る」といふ。

と崩御されたとある。それこそ仏儒にもとづく政治を展開しようとした天皇は心半ばで亡くなったのであった。また、別の言葉でいえば、いかに弓削道鏡に後事を期待していたかわかるというものである。しかし、後を託された永手等は白壁王を皇太子とした。

それにしても、左大臣従一位藤原朝臣永手が「遺宣を受け
て曰はく」というのは意味が不明である。永手がどこで女帝
称徳天皇の遺宣を聞いたかということである。女帝の臨終の
床にいつごろあつてどのようなにして聞いたのかということ
である。それとも、さきの軍勢力を背景に力で押し通したの
であろうか。吉備真備も当然ながらその背後にあつたのであ
ろう。それというのも天皇の側近にあつた妹由利だけが晩年
の天皇の側近にあつたからである。由利以外に天皇の遺言
を知ることが出来るものはいない(15)。

『続日本紀』卷第三九、宝龜元年(七七〇)八月丙午の条に、
称徳天皇が由義宮に行幸して以来、体調が思わしくなくなり
平城宮に還つた。それ以来、

此より百余日を積むまで、事を親らしたまふことあら
ず。群臣曾て謁見すること得る者無し。典蔵従三位吉備
朝臣由利、臥内に出入して、奏すべき事を伝ふ。

ということになつてゐるからである。女帝推古天皇の時と同
じ状態が発生しているのである。いふなれば、吉備朝臣由利
のみが天皇の遺言を知ることができる立場にあつたことに
なる。藤原永手が道鏡を差し置いて、「天皇の葬送儀礼」を

それこそ独断で専行した。葬送儀礼も藤原氏でおこない、道
鏡は排除されたのであつた。その上、このとき藤原氏は藤
原仲麻呂の乱の正当化をはかろうとした(16)。

続いて、称徳政治の否定である。それを『続日本紀』卷第
三十の宝龜元年(七七〇)九月壬戌条に見ることが出来る。
天皇が道鏡と共に仏教政治を行なおうとしたのを否定した
ものであつた。

令旨すらく、「比年、令外の官、其の員繁夥にして、徒
に国用を費して公途に益無し。官を省き務を簡にする
は、往聖の嘉典なり。要司を除く外は、悉く廃省すべ
し。また、去ぬる天平勝宝九歳、首・史の姓を改めて並
に毘登と為すを以て、彼此分ち難く、氏族混雑す。事に
於て穩にあらず。本の字に従ふべし。また、先者に袍衣
は疋を以て限とし、天下の服用、狭窄きを聞かず。比来、
意に任せて寛く大きなを競ひ好み、袍を裁つに更に
半疋を加ふるに至る。袍襖も亦齊しくして、表裏を弁へ
ず、習ひて俗を成す。費を為すこと良に深し。今より
以後、更に然ること得ざれ」といふ。

とある。ここに見るように、称徳天皇が行なつた仏教政治を

藤原永手らは全否定したのである(17)。

おわりに(藤原氏の野望)

常陸出身の地方豪族藤原氏は九州以来の天皇家とともにあつた最後の豪族ともいふべき物部氏を倒したのであつた。残るは天皇家そのものである。この排除の完成には、藤原氏は次の平安時代を待たねばならない。

常陸出身の藤原氏の弓削道鏡排除の理屈は、『水鏡』が称徳天皇の項でいうとおり、八幡神が称徳天皇の夢に出て「わが国はむかしよりただ人を君とする事は未だなき事なり」という一事であつた。藤原氏は東国の方より出で来た地方豪族であつた。これに対して、物部・大伴・蘇我は天皇と共に大和政権を作り上げてきた豪族であつた。この内のもは誰が有力な豪族がいなくなつたとき、力を持って来た藤原氏ではあつたが、それでもどこまでも天皇家よりはるか下にある豪族であつた。この藤原氏が政権を握るには、天皇家の下での活躍ということになる。これが『水鏡』の言葉が出てくる原因であつた。天皇家を凌駕することはとてもできなかった。

その上、道鏡即位のことはあまり大きな声でいうことはできなかった。それは光明子の人臣にして初めてである皇后にしていたからであつた。これが神武天皇と東大寺と関係の深かつた宇佐の神、そして天皇の軍事力にかかわる天皇家の腹心の豪族・和氣清麻呂と和氣広虫を利用しなければなかつた理由であつた。

それも広嗣の乱・藤原仲麻呂の乱は藤原氏が大和政権の主となろうとした試みであつた。そして、今、三度目の試みであつた。幸いに天皇家も母系制社会から父系性社会への過渡期で混乱の最中であつた。したがつて、この段階では、藤原氏は藤原鎌足以来の高級官僚として生きる道を選択せざるを得なかつた。そのことは『続日本紀』卷第三十一の宝龜二年(七七二)二月己酉の条にある左大臣正一位藤原朝臣永手こ薨伝に見ることができ、

石川朝臣豊成宣りて曰はく、「いしかは天命に坐せ詔りたまはく、おほみことみまし大臣の仕へ奉り来し状は今のみにあらず。掛けかまくも畏き近江大津宮に御宇しし天皇が御世には、おほまへつみ大臣の曾祖藤原内大臣、おほおほちぢはらのうちのおほおみ明く淨き心を以て天皇が朝をあか助け奉り仕へ奉りき。藤原宮に御宇しし天皇が御世みかど

には、祖父太政大臣また明く淨き心を以て天皇が朝を助け奉り仕へ奉りき。今大臣は鈍き朕を扶け奉り仕へ奉りましつ。賢しき臣達の世を累ねて仕へ奉りまさへる事をなもかたじけなみいそしみ思し坐す。

とあるものである。どこまでも「明く淨き心を以て天皇が朝を助け奉り仕へ奉りき」ということをする官僚としての藤原氏であつた。それが光仁天皇の継手を決める時に、競争相手のいなくなつた宮廷において、藤原百川はこの混乱に乗じて藤原氏の三度目の政權奪取を試みることになる。『水鏡』によれば、藤原百川は年老いた光仁天皇の前で、「齒をくひしばかりで、少も眠ぶらずして、四十余日立てりき。みかど百川の心の強くゆるはざることを御覽じて、『さらばとく山部親王の立つべきにこそ』としぶしぶに仰せ出だし給ひしを、御言葉いまだ終らざりしに、庭におりて、手を打ち喜ぶ声おびただしく高くして、人々皆驚きさわぎつ」と、百川の圧力が効を奏したのであつた。ここに山部親王の皇太子が出現した。論言如汗を利用したのであつた。百川の段階では、天皇の言葉は充分に重みをもっていたのである。これを利用して藤原氏は権力に大きく近ずいたのであつた。ただし天皇の外

戚としての道であつた。

【註】

(1) 滝川政次郎は「私の道鏡観」(横田健一『道鏡』付録第一八号、吉川弘文館、昭和三十四年三月刊)に「法王宮庁が春宮坊に等しいものであることを明らかにした『史林』、一九五四年三月刊」と述べた。

(2) 横田健一は『道鏡』(前掲書)の二、道鏡登場の花道の項で「臣下の家より出て、天平元年(七二九)皇后の地位にまでのぼつたことは、日本史上最初のできごとであつた」という表現をした。

(3) 『日本書紀』卷第十七の継体天皇二十一年の秋八月の辛卯の朔の条に、「詔して曰はく、『咨、大連、惟茲の磐井率はず。汝徂きて征て』とのたまふ。物部麁鹿火大連、再拜みて言さく、『嗟、夫れ磐井は西の戎の奸猾なり。川の阻しきことを負みて庭らず。山の峻きに憑りて乱を称ぐ。徳を敗りて道に反く。侮り嫚りて自ら賢しとおもへり。在昔道臣より、爰に室屋に及るまでに、帝を助りて罰つ。民を塗炭に拯ふこと、彼も此も一時なり。唯天の賛くる

所は、臣が恆に重みする所なり。能く恭み伐たざらむや』
とまうす。詔して曰はく、『良將の軍すること、恩
を施して恵を推し、己を怒りて人を治む。攻むること
河の決くるが如し。戦ふこと風の発つが如し』とのたまふ。
重詔して曰はく、『大將は民の司命なり。社稷の
存亡、是に在り。勗めよ。恭みて天罰を行へ』とのた
まふ。天皇、親ら斧鉞を操りて、大連に授けて曰はく、『長門
より東をば朕制らむ。筑紫より西をば汝制れ。專賞罰を
行へ。頻に奏すことに勿煩ひそ』とのたまふ』とある。
物部麈鹿火大連が継体天皇から「筑紫より西をば汝制れ」
といわれるような、天皇と共治する存在であった。喜田貞
吉が「道鏡皇胤論」（『史林』六一—四）を論じたことを、横
田健一は『道鏡』（前掲書）の『三、河内の里』で紹介して
いる。なお、物部氏については田中久夫「天孫降臨と日向
と隼人と——なぜ日本の歴史は日向から始まるのか」（『檀
原考古学研究論集』第十七冊所収、檀原考古学研究所、二
〇一八年九月刊）、中臣氏については、田中久夫「中臣氏・常
陸・鉄・神祇官」（『年中行事と民間信仰』所収、弘文堂、
昭和六十年二月刊）。田中久夫「鹿が春日の神の乗り物とな

った理由」（『金銀銅鉄伝承と歴史の道』所収、岩田書院、
一九九六年九月刊）。田中久夫「藤原氏の神と鹿」（『御影
史学論集』三二、御影史学研究会、二〇〇七年十二月刊）で
論じた。

（4）和気氏は『日本後紀』卷八、延暦十八年（七九九）二月乙未の
死亡にあたって記された贈正三位民部卿兼造宮大夫美作備
前国造和気朝臣清麻呂の薨伝によると、「為_レ人高直」であ
り、その事に依つて「與_二姉_一広虫_二共事_二高野天皇_一」。並蒙_二
愛信_一とある。そして「任_二右兵衛少尉_一。神護初授_二從五
位下_一。遷_二近衛將監_一」となった。姉_一広虫は從五位下葛木宿
祢戸主に嫁ぎ、天皇が落飜するとともに、出家し法名は法
均といい、進守大夫尼位となった。そして天皇の腹心とな
った。時に、大宰主神習宜阿蘇麻呂が道鏡を帝位に就かせ
ると、「天下太平」になるという八幡神教を伝えてきた。そ
こで天皇は夢の話であるがと、清麻呂を牀下に呼んで、本
来ならば、法均尼に行かせるのだが、法均は軟弱であり、
あまりにも遠路である。そこで姉の替りにお前を派遣した
い。よく神の教を聞いてきてくれといった。

これを聞いた道鏡は清麻呂を呼んで「大臣之位」にする

といった。ところがさらにこれより先に、道鏡の師である路真人豊永が清麻呂に「道鏡若登_二天位_一。吾以_二何面目_一可_レ為_二其臣_一。吾與_二二三子_一共為_二今日之伯夷_一耳」と語った。

清麻呂は使の持つ意味を知り、宇佐の神に託宣の意味する所をこころして尋ねた。「今大神所_レ教。是国家之大事也。

託宣難_レ信。願示_二神異_一と祈った。そうすると神が現われ次のように語った。「我国家君臣分定。而道鏡悖逆無動。輒望_二神器_一。是以神靈震怒。不_レ聽_二其祈_一。汝婦如_二吾言_一奏_レ之。天之日嗣必統_二皇緒_一。汝勿_レ懼_二道鏡之怨_一。」といった。

清麻呂はこの次第を報告した。是の報告は天皇と道鏡の逆鱗にふれ、因幡員外介とし大隅国に流罪とした。尼法均は還俗の上、備後国に流したということになった。それにしても、なぜ、道鏡を天皇にしようかという大事を備前の小豪族に確認に行かせたかが問題である。もつとも、「清麻呂之先出_レ自_二垂仁天皇太子鐸石別命_一。三世孫弟彦王。從_二神功皇后_一征_二新羅_一凱旋。明年忍熊別皇子有_二逆謀_一。皇后遣_二弟彦王_一。於_二針間吉備塚山_一誅_上之。以_二從_レ軍功_一。封_二藤原梟_一。因家焉」という家であった。小なりと雖も祖先に垂仁天皇の皇子を持つ家であった。そして、道鏡の師で

あった路真人おほち豊永も敏達天皇の皇子難波王の子孫という家であった（『新撰姓氏録』左京皇別）。ここに二人とも天皇家出身という自負心があった。しかも清麻呂の場合は近衛の将監という天皇家直属の軍事を担当していた。それが仲麻呂の乱以後、弓削道鏡の一族が着々と自分たちが担う場所を取っていく姿を見て焦燥感にかられた結果であったとしても不思議ではない。宇佐八幡宮の神託にあたって、この挙に出た。そのよりどころとしたのが「我国家君臣分定」であった。

『続日本紀』卷第十七、天平勝宝元年（七四九）十二月二十七日丁亥の条に、東大寺建立と光明皇后と八幡大神とのかかわりが描かれている。八幡大神が東大寺に來た時のことである。「八幡大神の禰宜尼大神朝臣杜女。その輿は紫色なり。一ら乘輿に同じ。東大寺を拜む。天皇（孝謙）・太上天皇（聖武）・太后（光明子）も同じく亦行幸したまふ。是の日、百官と諸氏のひとらと咸く寺に会ふ。僧五千を請して礼仏読経せしむ。大唐・渤海・吳の樂、五節田舞、久米舞を作さしむ。因て大神に一品を奉る。比咩神には二品。左大臣 橘宿禰諸兄、詔を奉けたまはりて神に白して曰はく、「天皇が

大命おほみことに坐いませ、申まをし賜たまふと申まをさく。去いにし辰年たつとし河内国かふち大県郡おほがたの知識ちしき寺じに坐います盧舎那仏るしやなほけを礼をみ奉まつりて、則すなはち朕われも造つくり奉まつらむと思おもへども、え為なさざりし間に、豊前とよみち国くに宇佐郡うさに坐います広幡ひろはたの八幡大神やほのおほかみに申まをし賜たまへ、勅のりたまはく、「神我天神かみわれあまつかみ・地祇くじを率ひきいいざなひて必かならず成なし奉まつらむ。事立ことたつに有あらず、銅あかがねの湯ゆを水みづと成なし、我わが身みを草木土くさきつちに交まじへて障さはる事こと無なくなさむ」と勅のり賜たまひながら成なりぬれば、歛よつほしみ貴たかみなも念おもひたまふる。然しかば、猶なほ止やむ事ことを得えずして、恐かしこけれど、御冠みかぶた献たまつ事ことを恐かしこみも恐かしこみも申まをし賜たまはくと申まをす」とのたまふ。尼杜女にちりめに從したが四位下さびを授さづく。主神かむつかみ大神おほかみ朝臣あそ田麻呂たまろに外ほか從したが五位下さび。東大寺とうだいじに封ふう四千戸ふよひ、奴百人ぬひやくにん、婢百人ひひやくにんを施ほこす。また東大寺とうだいじを造つくることに預あづかりし人ひとに、勞らうに隨したがひて位くらゐを叙じよすること差さ有り」といふものである。

(5) 『続日本紀』卷第三十二、宝龜三年(七七二)二月丁卯十六日の条に「内堅省ないけんしやうと外衛府ぐゑふとを罷やむ。その舍人とねりは、近衛このゑ・中衛ちうゑ・左右兵衛さうぶゑに分わけ配くばる」とある。これに対する註にも「内堅省と外衛府は称徳や道鏡に密接した官司であつたので、光仁朝に入ると冗官とされ、ここに廃止された」と考えている。

(6) 法臣円興は岩波の『続日本紀』脚注には、「法臣円興は俗姓

賀茂氏。七大寺年表には、元興寺僧で道鏡の弟子と見える」とある。天平神護二年七月乙丑十二日で「中律師から大僧都に任。同年十月に、道鏡が法王を授けられると同時に法臣の地位を授けられ、大納言に準じた月料を支給された。本条の『法臣』は追記か。靈異記下―三十八に、称徳朝の童謡をあげ、『道鏡法師以為「法皇」、鴨氏僧韻興法師以為「法臣参議」而天下政撰表答也』と見える韻興は円興のことであろう。『韻』も『円』も共に呉音「ラン」(王問反)。道鏡の失脚後、僧綱の任を解かれたか。宝龜九年正月少僧都に任ずとある。ただし七大寺年表では、宝龜九年まで大僧都と見え、同年表条に『去職敷』と注す」とある。道鏡と円興は深いつながりがあったのである。横田健一『道鏡』(前掲書)の「四、葛木山」の項で、二人は葛木山での修行仲間であつたと考えた。ところで、共にその祖先は神武天皇と東征してきた豪族であつた。そして中衛府は天皇の側近にあつて天皇の警衛にあたる官職である。『日本靈異記』は下巻の「災と善」との表相先づ現はれて、後に其の災と善との答を被る縁第三十八で「同じ時に、道鏡法師を以て法皇とし、鴨の氏の僧韻興法師を以て法臣参議として、天の下の 政を

摂りし表答なるを」という表現をしている。

(7) 田中久夫「紀州玉津島神社とその祭神衣通姫とささがにと
權傳馬」(『御影史学論集』四二、御影史学研究会、二〇一
七年十月刊)参照のこと。

(8) 田中久夫「神武東征伝説と吉備の杣山と」(『久里』三八、
神戸女子民俗学会、二〇一七年一月刊)

(9) 田中久夫「京都賀茂上下社と造都と杣山と」(『御影史学論
集』四〇、御影史学研究会、二〇一五年十月刊)

(10) 『日本書紀』卷第二の「天孫降臨」の項に、一書(第六)に
「天忍穂根尊、高皇産靈尊の女子栲幡千千姫万幡姫命、
を娶りたまふ。而して児天火明命を生む。…其の天火明命
の児天香山は、是尾張連等が遠祖なり」とある。

(11) 平神護^{二十日}二年十月壬寅の条および『続日本紀』卷第二十九、
神護景雲二年(七六八)十二月甲辰^{四日}の記事参照のこと。

(12) 祥瑞については田中久夫「祥瑞としての白亀と紀伊氏と—
天皇の紀州行幸とのかかわりのなかで—」(『日本文化論』
創刊号、流通科学大学藤原喜美子研究室、二〇一七年八月
刊)で論じた。なお、神護景雲二年はなぜだか『日本史年表』
(岩波書店、一九八六年七月刊)は空白のままにしている。

(13) 横田健一は『道鏡』(前掲書)の「六 道鏡の政治」で、法

王宮の設置は、道鏡が「法王として實際政治に従来以上に
政治に大きく関与し、のり出そうとする決意をしめすもの
とみてよからう」としたものであるという位置づけをした。
確かに女帝称徳天皇のそばちかくにあつて政治をおこなう
には、天皇のそば近くで天皇の意見を聞ける位置にいなけ
ればならない。それでなければ政治はおこなうことはでき
ない。天皇の機関はそのままにして、他に法王宮の組織を
作りそこで政治をおこなうことになる。したがって当然、
称徳天皇は女性の政治家をつくることになる。伊勢老人・
宮膳常陸筑波采女・壬生宿祢家主・尚掃美濃真玉虫・常膳
上野佐位采女らを本国の国造に任命することがそれであつ
た。先に紹介した和氣広虫が称徳天皇に宇佐へ神託の確認
に行かせられるのもこれである。次の天皇をきめるという
重大な案件のために広虫が出かけるのである。なお道鏡が
蝦蟇に「緋袍人ごとに一領」を与えたということは別に考
える必要がある。

(14) 称徳天皇は藤原氏にも気を使ってであろうか。『続日本紀』
卷第二十九、神護景雲三年(七六九)二月壬寅^{三日}の条で「左大臣^{さいだいじん}

の第に幸したまひて、従一位を授く。その男従五位上
家依・従五位下雄依、その室正四位下大野朝臣仲智に並に
一階を賜ふ」という行為をしている。二月癸亥条には右大
臣吉備真備の第に幸し、正二位を授与している。公平を圖
つてゐる。

(15) 田中久夫「推古天皇と聖徳太子の政治の果たした役割」
『日本文化論』二号、流通科学大学藤原研究室、未刊) 参
照のこと。さすがに『水鏡』の「五十代光仁天皇」の段で
も、この継承は不審に思つたらしく、大納言文屋浄三と白
壁王と浄三の弟宰相大市の三名の候補者があつたといひ、
その内、宰相大市が引き受けの意志を示した。それに対し
て、「すでに宣命を読むべきになりて、百川・永手・良繼、
この人々心を一つにて目をくはせて、ひそかに白壁王を太
子と定め申す由の宣命をつくりて、宣命使を語らひて、大
市の宣命をば巻き隠して：この帝の位につき給ふ事は、ひ
とへに百川のはかり給へりしなり」と記述していることが
このことを示している。

(16) 『続日本紀』卷第三九、宝亀元年(七七〇)八月丙午の条で
ある。「高野天皇を大和国添下郡佐貴郷の高野山陵に葬り

まつる。従三位藤原朝臣魚名を御前次第司長官とす。従五
位下桑原王を次官。判官・主典各二人。従四位下藤原朝
臣繼繩を御後次第司長官。従五位下大伴宿祢不破麿を次官。
判官・主典各二人。皇太子(光仁天皇)、宮(平城京)に在り
て留守したまふ」という記事である。これに対して、「道鏡
法師は梓宮に奉りて、便ち陵の下に留り慮す。天皇、
由義宮に幸したまひてより、便ち聖躬不予するを覚えたま
ふ。是に即ち平城に還りたまふ。此より百余日を積むまで、
事を親らしたまふことあらず。群臣會て謁見すること得る
者無し。典蔵従三位吉備朝臣由利、臥内に入出して、奏す
べき事を伝ふ。天皇、尤も仏道を崇めて、務めて刑獄を恤
みたまふ。勝宝の際、政、候約を称ふ。大師(藤原仲麻呂)
誅せられてより、道鏡、権を擅にし、軽しく力役を興
し、務めて伽藍を繕ふ。公私に彫喪して、国用足らず。政刑
日に峻しくして、殺戮妄に加へき。故に後の事を言ふ者、頗
るその冤を称ふ」ということになつた。一方、道鏡一族に
対しては、道鏡は下野の薬師寺の別当とし、『続日本紀』卷
第三九、宝亀元年(七七〇)八月辛亥には、「道鏡が弟弓削
浄人、浄人が男広方・広田・広津を土左国に流す」と、流

罪に処すことよって、弓削氏を排除していった。そして『続日本紀』巻第三十二、宝龜三年(七七〇)八月丙寅十八日の記事である。「從五位下三方王、外從五位下土師宿祢和麻呂と六位已下三人を遣して、廢帝を淡路に改め葬らしむ。乃て、当界の衆僧六十口を屈して、設齋し行道せしむ。また、当処の年少くして稍く淨行有る者二人を度して、常に墓の側に廬して、功德を脩めしむ」とある。淡路廢帝を供養することよって、仲麻呂の名譽を回復しようとしたのである。どうしてこのようなことができるのであろうか。

(17)なお、律令政府の租税と分配の仕組みについては、石母田正の『日本の古代国家』(前掲書)第三章第四節「古い型の省と新しい型の省」には、やさしくわかりやすく書かれて
いる。

【追記】本論作成にあたって関西大学学生時代に本当にいろいろお世話になった横田健一先生の著書『道鏡』をはからずも読むことになった。出版された時、当然ながら「我が先生の著書」だといって誇りに思ってた。今回のこの報告を書くに当って再度、読むことになった。当然ながら読み方を

異なつて来た。今、母系制社会の研究から道鏡に至った我が身にあつては、孝謙天皇の読み方が異なつていたのである。書きながら引用しながら先生のお怒りの顔が出ては消え、出ては消えていくには閉口した。もうすぐ先生の膝元へ行く身でもあるので困ったことである。きっとそのときには学生服を着て机の前で顔を下に向けたまま耐えている姿があるのではないであろうか。ともかく、先生の御本と真正面から向きあつた日々であつた。

本論は御影史学研究会十月例会(第三九三回)で報告したものである。日時は二〇一八年十月二十八日(日)一三時〜一七時、会場は神戸女子大学ポートアイランドキャンパスD館四〇三教室。

みかげ民俗 五号（一九七八年九月）

伝承と資料

八百比丘尼伝承成立考

—若狭の八百比丘尼伝承を中心として—

（京都府竹野郡丹後町宮）竹野神社の信仰圏に

ついでのリポート

越後の旅—史蹟と伝説を求めて—その一

お田植祭り

葬制における猫についての私見

白馬の民俗

滋賀県八日市市中野神社の祭祀

田中 久夫

酒向 伸行

西尾 正仁

荒嶋 嘉子

柴本 嘉美

西岡 幸治

千布 雅子

大江 篤

みかげ民俗 六号（一九八二年九月）

平安期における葬送と「物」

—『今昔物語集』の世界を中心にして—

オサカベに関する覚書

伊賀見の年中行事

—奈良県宇陀郡曾爾村伊賀見—

高知県高岡郡中土佐町久礼の婚姻・産育習俗

兵庫県明石市魚住町清水清水神社の祭礼

東二見の葬制

土葬と火葬

歴史と民俗学—歴史学習における民俗学—

酒向 伸行

成清 弘和

西尾 正仁

荒嶋 嘉子

大江 篤

藤江 久志

中村 雅俊

白土 節子